

「特性理解し維持管理」

10周年
講演会

ASR、塩害対策学ぶ



石川会長

福井県コンクリート診断会(石川裕夏会長)は22日、設立10周年記念講演会「北陸地方におけるコンクリート構造物の劣化と維持管理

の最新事情」本格的な維持管理の時代を迎えて」を開いた。金沢大学の鳥居和之教授と金沢工業大学の宮里心一教授が講演した。

講演会の冒頭、石川

会長は「当県診断士会は設立以来、自治体や大学と連携して地域密着型の活動を続けていく。コンクリート構造物の維持管理では、地域特有の課題が多く存在する。地域の特性を十分に理解したうえで取り組む必要があることをこれまでの活動を通して強く認識してきた。その地域を良く知る診断士こそがその地



域のコンクリート構造物の維持管理を担っていかねばならない。診断士会はその受け皿としての役割を果たしていく」とあいさつした。

鳥居教授は「北陸地方におけるASRの現状と維持管理の最新技術」の題で講演した。

全国でのASRの発生状況やASR反応性骨材の特徴などを解説し、北陸で講じるべき対策について考えを述べた。鳥居教授はフライアッシュ(F.A)がASRの抑制対策に有効であると指摘し「北陸では品質の良いF.Aが供給されているのでこれを積極的に活用するべきだ」との考えを示した。

宮里教授は「北陸地方における塩害の現状と維持管理の最新技術」の題で講演した。

講演では、福井県生コン工業組合と共同で九頭竜川産と今津産の骨材を用いて、塩害対策にF.Aを使うことを検討した成果を報告。「普通コンクリートが29年

目から鉄筋腐食を始めたのに対し、F.Aを併用したコンクリートは56年目まで鉄筋腐食しなかった」と指摘し、「F.Aを使うとLCCも抑制でき、コスト的にもメリットが見込める。F.Aコンクリートを使うことが構造物の予防保全にもつながる」との考えを示した。